## 随筆

# 儀ちゃんと風と共に去りぬ

古城 庸子

立春は過ぎたのにまだまだ寒い毎日だ。でも、庭の白梅も紅梅も美しく咲きしている。儀ちゃんがいなくなってからは、ろくな手入れもしてやらない私だ。それなのに健気に咲いてくれている。

私は花に「ごめんネ頑張って咲いてくれて。私を元気づけてくれるためよねえ」と心の中でつぶやきながら、外出したり、帰宅をしている。

コロナがまだグズグズしているので、私の店「夢子」は来月の6日まで休みにしている。本当にこのご2年近い月日の間には、何日営業したかしら？ 店を休んだから取り止めが、延期。らって、従業員のお給料を払ってやらなければならない。だって従業員それぞれに生活も家族もあるのだから、これだけはきちっと守ってやるのが当たり前の事だ。

保障のお金を頂けるのだが、家賃もあるし、こっちもさんざんだ。

こんな時思うのはやっぱり儀ちゃんの様な思いに一瞬だけ関を入った所に、2メートル四方位ある。

他界する日まで働いていた儀ちゃんだ。家にいたって、いつも書類に目を通しているのテレビで観た映画がある。「風と共に去りぬ」だ。

この長い映画を何故か儀ちゃんは文句を言わず最後まで観たのだった。よほど感動したらしい。

しばらくの間、儀ちゃんは「風と共に去りぬ」の話ばかりしていたもの。おかしな人だったなあ…なんて考えながら1人、甘酒なんかのみながら窓打つ風の音を聞いている私だ。

ないよ」とため息をつきながら言い返すから家に居る時間は少なかった。それに家にいたって、いつもひとつ、2人で家のテレビで観た映画がある。「風と共に去りぬ」だ。

この長い映画を何故か儀ちゃんは文句を言わず最後まで観たのだった。よほど感動したらしい。

しばらくの間、儀ちゃんは「風と共に去りぬ」の話ばかりしていたもの。おかしな人だったなあ…なんて考えながら1人、甘酒なんかのみながら窓打つ風の音を聞いている私だ。

# あすか交通オリジナル「そらまめツアー」

## 地域密着型の日帰りバス旅行をレポート

あすか交通オリジナル企画の日帰りバス旅行「そらまめツアー」は、普段使っている身近なバス停から乗車でき、気軽に出かけられると話題だ。そこで、2月開催の南房総ツアーに小紙編集部が参加。観光スポットやツアーの魅力をレポートする。

今回参加したコースは「佐久間ダム河津桜とお花畑で春を先取り♪舟盛海鮮ランチで幸せ房総！」料金は1名8500円。朝の出発は7時半～8時半、ガーデンタウン1番、幸町公民館、稲毛海岸駅、検見川浜駅、ベイタウン・コア、各バス停を回って参加者が乗車。スカイタウンバイマンションは接続便があり、稲毛海岸で本便へ乗り継ぎ可能。

密にならないように乗車人数を制限、乗車時には検温と手指の消毒、車内は5分毎に自動換気が行われるというからコロナ対策は万全だ。

最初に立ち寄ったのは館山市内の人気観光スポット「渚の駅たてやま」。海洋民俗をテーマとした博物館や、渚の駅たてやまの名誉駅長「さかなクン」の世界が広がるギャラリーなどを見学。

その後、フラワーラインの沿道を黄色く縁取る菜の花に癒されつつ伊戸漁港へ向かった。ランチは地元の人も通うという「漁港食堂だいはち」で海鮮料理。目の前に広がる海を眺めながらの最高のロケーションで舟盛の新鮮なお刺身定食をいただいた。

食後は千倉町の白間津お花畑へ移動。ストック、キンギョソウ、キンセンカなど色とりどりの花が咲く南房総では、一足早い春の訪れを感じられた。

そして、南房総一の桜の名所、佐久間ダム親水公園（鋸南町）へ。この日は2月中旬だったので、少し残っていた水仙のほか、三分咲ほどの頼朝桜（河津桜）、美しい梅も見ることができた。佐久間ダム周辺には2200本もの桜が植えられており、シーズン到来時には圧巻の景色だという。

45分間ほど里山の魅力を満喫したあとは、「道の駅保田小学校」へ。廃校になった小学校を有効活用した施設で、メディアにも度々紹介される有名スポットだ。教室は飲食店や宿泊施設として再利用され、黒板や机など、当時の学校備品も残されているノスタルジックさが人気。お土産センターに姿を変えた元体育館で、3千アイテムのなかからゆっくりお土産を選んでツアーは終了。各バス停の到着時間は17時半～18時半とあまり遅くならないのもありがたい。行く先々で地域の歴史や観光スポットなどをアナウンスしてくれるバスガイドさんは、親しみやすい人柄と軽快な語り口で移動中も楽しませてくれた。

普段は車で小旅行することが多いという参加者の女性は、久しぶりのバス旅行だったとか。「運転しなくていいので景色を楽しむことができました。千葉県内に住んでいるのに、まだまだ知らなかったたくさんの魅力的な場所があるのでまた利用したいです」と話した。

あすか交通の「そらまめツアー」では、季節ごとにさまざまなオリジナルツアーを企画中。今後はどのようなツアーが登場するのか楽しみだ。

◇問い合わせ先◇あすか交通・ツアー担当◇☎043・445・7791（平日9時～17時）

## 今何故かフィルムのカメラブーム

今、フィルムカメラが流行している。スマートフォンやデジタルカメラで簡単に写真が撮れる今の時代に何故？しかもそれは昭和を懐かしむ40代以上の人よりむしろフィルムカメラを知らずに育った10代20代の若者を中心にこの流行は起こっている。

フィルムカメラは昭和の時代に作られたものが大半である。令和の今、平成生まれでパソコンやデジタルカメラに囲まれて育った若者達が古い昭和のカメラを使っているのは非常に面白い現象だ。またフィルムカメラは使用するレンズやフィルム、現像する写真店の薬品や印画紙により色の出方が違い、写りも変わってくる。現像から上がってこないとどのように写っているかわからない、スマートフォンやデジタルカメラのように撮ったその場で画像を確認することも出来ないが、そんな偶然性や現代ではあまり感じることが出来ない不便さが若者を虜にしているのかもしれない。そんな人気のフィルムカメラは、中古カメラ店で実際に手に取りきちんと整備されているものを買うのが得策のようだ。若者らしくネットオークション等で手軽に安価で手に入れる人も多いようだが故障品、不良品も少なくないと聞く。

稲毛区小仲台にある「ぷりんと工房小仲台店」ではフィルムカメラの買取に力を入れている。もちろん整備されたカメラの販売もしている。家に眠っている古いフィルムカメラがあれば是非問合わせしてみては…。

中古カメラ専門店
**ぷりんと工房　小仲台店**
**043・207・6950**
金曜定休

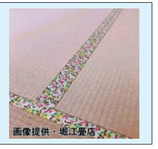
**次回発行日は4月1日（金）**

**身近な情報は電話〇四三（二五六）四四一四へ**

## 有限会社 堀江畳店

千葉市稲毛区宮野木町

1962年に西千葉で創業、1970年代後半に工場を宮野木へ移転し現在に至る、創業60年目の老舗畳店。寿洋さんが三代目。ワークショップや異業種とのコラボレーションなど、畳作りにとどまらない幅広い取り組みを展開中。


画像提供：堀江畳店

# 発見！chibakatsu 千バカツカンパニー

## 千葉の活躍企業訪問記

**小紙編集部記者・稲しん子が今回訪ねたのは、千葉市稲毛区の堀江畳店さん。日本伝統の床材である畳について、取締役の堀江寿洋さんにお話を伺いました。長年慣れ親しんできた畳ですが、突き詰めれば実は知らないことばかり。畳の世界、奥が深いです。**

**堀江さん（以下・堀）**　畳は大きく分けると畳表、畳床、畳縁の3種類の材料でできています。畳床はもともとは藁床、つまり稲から作られていました。畳表の原材料であるい草も稲も、田んぼで育つ農作物です。実際、国内産いぐさの産地である熊本県の八代では、稲とい草を二毛作しています。

**稲しん子（以下・稲）**　無駄がないですね。

**堀**・ただ、畳生産の方向性は変化しています。国内で流通する天然い草のメインは中国産。しかしそれも中国産でもいずれは樹脂製や和紙製などの工業製品に抜かれるだろうといわれています。襖にしろ壁紙にしろ、住宅に使われる建材の宿命みたいなもの。昔は無垢材だったフローリングも、今は合板が当たり前です。

**稲**・い草以外の素材が主流になると、畳の概念が変わってしまいそうです。

**堀**・私自身も、日本の気候風土に適した建材という意味で、天然い草の畳を大事に守りたいと思っていますが、工業製品にはプラスの面もありますよ。メンテナンスが楽ですし、カビが発生しにくい。日焼けによる変色の心配も小さく、耐久性も高いです。反面、新品でも香りがなく、夏場の肌触りは天然ものに劣ります。どちらも一長一短があるんですよね。お客様にはそれぞれのメリットとデメリットをきちんとお話しして選んでもらうようにはしています。

（サンプルのカタログを見せていただく）

**稲**・うわぁ、きれい。カラー畳ですか。こんなに多彩な色が揃っているんですね。

**堀**・これが工業製品のメリットの一つです。天然ものには色づけができませんから。こういう畳を使うと、従来の和室とは異なる雰囲気が作れます。

サンプルを見せていただき、バリエーションの多彩さに驚く稲しん子記者。

堀江寿洋さん

**稲**・空間のコーディネートもしやすくなりますね。

**堀**・今の和室はリビングの続き間になっている間取りがほとんどかと思います。リビングと和室との連続性を演出したいという場合は、明るい色合いの畳を選ぶと一体感が出て、空間が広く見えます。

**稲**・天然か工業製品か、迷ってしまいそうです。

**堀**・要は何に重きを置いて畳を選ぶかでいと捉え、天然素材ならではの優しさを尊ぶ人もいれば、デザイン性を重視して工業製品の畳を選ぶ人もいます。今後の畳のニーズはこの二極化が進んでいくでしょう。また、子育て世代には置き畳や畳コーナーに関心を持ってもらえているようです。

**稲**・赤ちゃんを寝かせたり遊ばせたり、畳があれば便利ですよね。自分の暮らしに合った畳が選びやすくなっている状況なのだとしたら、もっと見直されていい気がします。

**堀**・そんな畳をもっと知ってもらう機会として、今はコロナ禍で休止していますが、ワークショップを何回か開催したりしています。ミニサイズの畳を実際に作ったり、畳に関するクイズに答えてもらったり、カフェで開催した時はい草入りのパンや焼き菓子をみんなで食べたり、といった趣向です。

**稲**・い草のパン、ですか？

**堀**・無農薬い草の畳を取り扱っていた時期だったので、それをPRする方法として企画しました。「食べられます」とアピールすればキャッチーだと思ったんですよね。もちろん、使用したのは畳表にするい草ではなく、食用のい草ですけれど。

い草入りのパンを新発売した際に制作された告知チラシ。

**稲**・面白い取り組みで、とても興味深いです。今後、畳との向き合い方をどうしたいとお考えですか？

**堀**・家の中のメンテナンスを考えた時、畳の優先順位は低いでしょう。よほど余裕がなければ、畳替えにまで気が回りません。それをもう少し気軽に替えられるものにしたいというのは畳屋さんとコラボした商品で」と説明してもらえるだろうという期待もありました。

**堀**・ワークショップ後も継続し、市内のパン屋さんや洋菓子店さんとコラボレーションする形で畳パンなどを作ってもらっています。お客様は「畳のパンって何だ」となるでしょう。

**稲**・確かにすごいインパクトです（笑）。

作業場で、畳を作るための機械を見学。

**稲**・私も畳ともっと上手に付き合いたいです。ありがとうございました。

思いはあります。例えば、工業製品の素材と天然畳を混合した畳が登場しているのです。これなら畳ならではの香りも楽しめて肌触りも心地良く、コストも抑えられる。小さなお子様のいるご家庭にもお薦めだと思います。

**稲毛新聞編集部記者　稲しん子（いな　しんこ）**

千葉市に住むこと30年以上。年間に約200件の取材を行うなど、話を聞くことが大好きで好奇心旺盛なミドルエイジ記者。稲毛新聞から「稲」と「新」の2文字をもらいペンネーム「稲しん子」と命名された。最初はちょっと変な名前だと感じていたが名乗っているうちに愛着が…。「稲しん子にぜひ取材してほしい」という千葉市の企業様、ご連絡お待ちしています。